

パネルディスカッション
「原子力施設等で発生したけが人の
医療機関への受け入れと看護について
——体表面の汚染が予想される場合——
医療機関の汚染防護対策と被曝・汚染の測定について」
Measures against radioactive contamination at a medical institution,
measurement of radioactive contamination of the patient and
evaluation of exposure to medical staff

佐藤 斉

Hitoshi SATO

茨城県立医療大学保健医療学部放射線技術科学科

Department of Radiological Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

被ばく医療機関では、原子力施設などにおける被ばく事故に関する対応を適確に行うために、日ごろからの準備と、定期的な教育・研修・訓練などが実施されている。原子力施設などでの事故等により、医療措置が必要で放射能汚染が予測されるような患者を受け入れることはごくまれなことであろうが、そのような事態の際に適確に対応するためには、組織体制をはじめとして設備・装備や具体的な対応を考えて必要な準備をすることが求められる。

本パネルディスカッションでは、体表面の汚染が予測されるけが人を受け入れる際の汚染防護対策と汚染の測定についての要点と、実際の現場ではどのような問題が生じうるのかを考察するために、受け入れ準備から患者搬送時、退出時の要点を紹介した。医療機関における汚染防護対策として、放射性物質による汚染の拡大防止対策、放射性物質における汚染の測定と除染対応などがあげられるが、医療関係者の被ばく防護を適切に行うためには、医療スタッフの放射能・放射線に対する理解が欠かせない。医療機関では主に診療放射線技師が放射線量の測定と汚染評価を担当するが、現場で対応する医療スタッフも測定値を正しく認識する必要がある。確実に汚染の評価を行い、効果的な汚染対策と放射線被ばく防護により、診療におけるそれぞれの業務役割に集中して臨むことができる。本パネルディスカッションでは、汚染状況の確認に用いる放射線測定器の種類と、それぞれの放射線測定器の特徴や汚染評価の基本的な内容も紹介した。討論の中では、放射線や放射能汚染に対する考え方はさまざまであるが、医療関係者、とりわけ各医療機関内での認識が統一されている必要性を実感した。

また、原子力施設等における広域的な事故の場合は、発災直後には多くの住民が健康不安を感じて、地域の

doi: 10.24680/msj.6.1_75

保健所や医療機関を訪れる。そのため、被ばく医療機関以外の近隣の医療施設においてもそれぞれ対応の準備が必要となる。茨城県東海村の JCO 事故や福島第一原子力発電所事故の例を紹介したが、事故当初は近隣の医療施設に相当人数が押し寄せて大きく混乱した。JCO 事故を踏まえて、住民対応を含めた緊急被ばく医療に対する準備がされたはずであるが、福島第一原子力発電所事故の際にはその規模の大きさから十分に機能しなかった。その教訓から、大規模な原子力災害対応のために地域防災計画（原子力災害対策編）が見直され標準化が図られており、その一部を紹介した。現実には多くの課題があり、医療現場の意見や実態などを集約するなど、今後の学会としての役割も大きいだろう。